2013.12.15

No.180

編集・発行人　樋口みな子

E-mail
minakoginga@gmail.com
（連絡用）
URL http://www13.plala.or.jp/minginga/
郵便振替「銀河通信」
02740－7－56535
（郵送6号分1,000円）

知る権利を奪う秘密保護法に反対します

12月6日、特定秘密保護法が成立しました。衆議院でも参議院でも十分な議論を尽くさぬままに、自民・公明の与党多数で強行採決されたことに怒りでいっぱいです。

11.27札幌弁護士会主催のデモに市民600人！
撮影・北海道民医連新聞

戦争を体験した多くの人たちが、治安維持法と同じ道をたどると懸念しています。７２年前に秘密漏えいの疑いで北海道帝国大（現北海道大）学生、宮沢弘幸さんが逮捕された「宮沢・レーン事件」。旅行で見聞した海軍根室飛行場などについて語ったことが、軍事機密とされたのです。しかし秘密ではなく、広く知られていたことでした。

社会教育者の大田堯さんは、「治安維持法の時代を生きてきた。社会が戦争に徐々に引きずり込まれていき、情報がなくなり、ものを考えることを無意識に停止させられていった。いま、そんな時代に近づいているのではと恐れます」と述べています。

戦争への道を開く秘密保護法には絶対反対です。

私もささやかですが、やれることをしました。銀河通信読者にデモの参加呼びかけや自身も参加。自民党や、公明党への反対の意思表示のFAXなど。

「知る権利は人間が自分の頭で考える権利」です。ユダヤ人の哲学者、ハンナ・アーレントも「考え抜くことで人は強くなる」と訴えました。

２年前に亡くなった父は新聞や本をよく読む人でした。公務員でしたが、４０代の頃、推されて労組の執行委員長をしていたことがあります。小さな分会ですから、通常の仕事をしながら組合員をまとめていました。賃上げ闘争でストライキを決行。減給処分を受けました。秘密保護法は平和と民主主義を奪いますが、労組がストライキをしたという記事はありませんでした。声欄に「緊急時にこそ労組が決起しなければ存在意義はない」という意見が載りました。私も同感です。

銀河通信読者の福原正和さん（医師）が北海道新聞に投稿しました。市民の声を代弁していますので紹介します。「沖縄返還時、米軍施設の移転費用の日本側負担、米軍核兵器持ち込み容認などは、国民には全く知らされていませんでした。

福島第１原発事故時、放射性物質の拡散状況を予測する『緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム(SPEEDI)』の情報は国民には知らされず放射能が高い中、住民は給水のために並びましたが米軍には通知されていたというではありませんか。（中略）今回の秘密保護法は、国民に知らせない情報を米国とは共有するといいます。誰のための法なのかを考えると、絶対に反対です」。

ローゼ・レッサとハンナ・アーレント

「高橋健治とローゼ・レッサの生涯」のシンポジウムに参加して

10,25　挨拶する緑爽会の近藤緑さん（市ヶ谷の日本山岳会会議室）

シンポジウムは三高・京大を通じて卓越したクライマーでスキーの名手だった高橋健治は今西錦司・西堀榮三郎と三羽烏と呼ばれながら戦後まもなく夭折。健治の死後、半世紀を生きて『北越雪譜』の独訳・英訳を遺し、世界平和にも貢献したローゼ・レッサの生涯を斎藤清明さん（京大学士山岳会）、坪井靖子さん（モア・ジョイ会）吉田理一さん（日本山岳会越後支部）が語りました。

ローゼは、夫の死後も日本に留まり続け平和のために力を尽くされたこと。また瓢湖の白鳥を守る活動にも力を入れていらしたことも知りました。ローゼが撮った一枚の「白鳥に餌をやる人」のモノクロ写真に惹きつけられました。どんな人生を送られた女性なのかお話を聴いてみたいと北海道から上京しました。

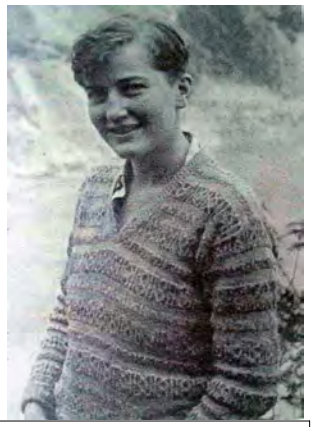
ローゼは1930年代に北海道や樺太にも出かけ、たくさんの写真を撮っておられたようですが、自身の所有権なんてことにはあまり関心がなかったようで、人に差し上げてしまって、当時の貴重な写真が散在してしまっているのが残念です。

ローゼは、動物学から民族学まで幅広く活躍され、「知の巨人」と称された梅棹忠夫とも交流があったというのも、アイヌ民族や山間部の民衆というテーマでは一目置いていたからでしょう。登別には「アイヌ神謠集」という素晴らしい本を著して19歳で亡くなった知里幸恵の姪が住んでいて、今も幸恵さんの業績を伝え続けています。ローゼさんが姪のむつみさんとの出会いがあったら、どんなに喜んで下さったかと思いました。

1955年に日本の子供たちが海外の人たちと相互理解と友好を深めるために非営利団体 モア・ジョイ会を設立されたことも、坪井靖子さんからお聞きしました。全くの個人で「喜びを分かち合い、平和のために人々の相互理解を助けよう」という趣旨のなんと慎ましく美しいことか！　ローゼは英語やドイツ語を教えながら、モア・ジョイ会を広げました。その生徒たちは3000人。市井の市民として出来ることを実践されたのです。しかも、自分の名前が出ることを大変嫌ったそうです。

戦時中は食料を得るのも大変な時代。健治の闘病を支え、亡き後は一人娘を育てながら　英語やドイツ語などを教え、懸命に生きて来られた女性でした。

一度もドイツに帰ろうと思われなかったのでしょうか？坪井さんは「健治と共に歩いた日本アルプスの中当時の蕨平、蓮華温泉、細野、松之山などの村落で知り合った、厳しい自然と向き合って忍耐強く生きる純朴な人々の優しさが彼女の最も苦しい時代を支えてくれたということもありました。彼女は、日本の人たちから受けた友情に、そして健治の愛に忠実に報いた、と私には思えるのです」と書いています。



写真提供・モア・ジョイ会
若き日のローゼ・レッサ

ローゼの訳本。江戸時代の商人であり文化人の鈴木牧之の　「北越雪譜」をドイツ語で世界に紹介したのも話題になりました。私も「北越雪譜」を読んでみたいと思います。

好奇心旺盛で、自由を愛したローゼは私たちに多くのことを伝えてくれました。

お目にかかったことはないのに、ローゼを語る山岳会の方、元新聞記者、モア・ジョイ会の方たちのお話から、ローゼの姿が浮かび上がってきて本当にいいお話が聞けたと感動しました。

その余韻が冷めやらぬまま、翌日、岩波ホールで「ハンナ・アーレント」を観ました。

アーレントはドイツ系ユダヤ人哲学者で、「全体主義の起源」などの著作で知られます。

ナチスの戦犯アイヒマンの裁判を傍聴したアーレントは、ニューヨーカー誌で、アイヒマンは極悪非道な犯罪者ではなく、平凡な人物であると考え、どこにでもいる人間の中に「悪の陳腐さ」を見たのです。その結果、ユダヤ人社会から批判が殺到し、親友も大学での職も失うのです。

戦争とは何か、なぜ人は殺し合うのかという単純な疑問に、アーレントは答えを提出します。諸悪の根源は、人間が思考を停止し、立場上、命令に従うだけの人間となること。つまり、人間としての善悪の判断思考の停止が、悪や暴力、大量殺人を生むこと訴えます。事実から目を背けず、考えることを放棄してはならないと訴える姿は強く美しい。

ローゼは1908年生まれ。アーレントは1906年生まれです。戦争の時代、過酷な時代を生き抜いた二人に共通するのは、平和な社会へのたゆみない行動と発言でした。

たった一日だけの東京での小さな旅でしたが、大いに勇気づけられ、明日への糧を頂きました。

年内に180号を発行出来ました。今年8月には銀河通信25周年を祝う会を開いていただきました。HPに25周年に寄せる読者のメッセージをアップしています。来年もご愛読よろしくお願いします。新年号はお休みします。
読者のみなさまも穏やかな新年をお迎えください。2014年は自由に発言できる国民主権を取り戻す年にしたいですね。（み）

本 Books

私のシネマライフ

黒龍江への旅

高野悦子著　岩波書店
920円＋税
（黒龍江への旅）
1100円＋税

今年2月に83歳で亡くなった、岩波ホールの総支配人、高野悦子さんの「悔いなき自分史」が「私のシネマライフ」です。世界中の埋もれていた名作を紹介し続けた私の尊敬する女性です。神保町の書店で迷わず買いました。

満洲での生い立ち、南博氏のもとで映画研究に没頭した学生時代の体験や、映画監督を目指しパリの高等映画学院に留学し、帰国後岩波ホールの総支配人になり世界の名画を上映するまでの波瀾万丈の人生が描かれます。

29歳で、フランスに留学する向学心と、情熱に圧倒されます。語学を必死に学び、高等映画学院に見事合格し、最高得点の論文を書き上げたのです。帰国して演出家になりますが、ポルトガルとの合作映画「鉄砲物語」がいつのまにか日米合作に変わってしまいます。そのことが転機となり、岩波ホールの総支配人になるのです。。高野さんは水を得た魚のように、「戦後日本映画史」や「海外の映画史研究」などの講座を開き、観客の心を掴みます。

地味な映画、知られていない名作、女性でなければ描けない映画、高野さんが選び抜いた映画の数々が本書に散りばめられています。面白くて一気に読みました。

「黒龍江への旅」は満鉄に勤務した父の死後、父が鉄道を敷設してまわった満洲の地を旅したときのことを綴った紀行文です。高野さんにとって少女時代を過ごした故郷は、当時の思い出をたどる旅でもありました。父と生前、縁があった、中国の有名な医師が同行しての大連、大石橋、瀋陽、吉林、哈爾濱、そしてソ連（現ロシア）との国境の町・黒河…。各地を訪れた旅の印象と少女時代の思い出や、父から語られた話などが織り込まれていて、父を再発見していく過程が詩情豊かに描かれています。

若い頃は、仕事で家庭を顧みない父が嫌いだったという高野さんが、同僚や、中国人に尊敬されていた姿を知り、自分がどんなに愛されて育ったかを知るのです。エピローグのタイトル「ひとはみな兄弟となる」は、ベートーベンの第九交響曲の最終楽章で歌われるシラーの「歓喜の歌」のなかの詩句です。そのときの高野さんの心のありようを示しています。その心が伝わったからこそ，中国側も映画の上映を許可してくれたのです。高野さんは黒龍江への旅を通して「長い日中の歴史の上に、悲しい一時期があったとしても、だからこそ、これから築く新しい歴史を大切に守っていかなければならないのである」と結んでいます。

法服の王国 上・下 小説・裁判官

黒木亮著　産経新聞出版
上下1890円＋税

憲法と人権を守るという信念を貫き、地方を転々とする村木と組織の本流を歩む津崎。二人を軸に物語が進みます。

青法協に所属しているため冷遇される村木の生き方に共感します。中心は原発訴訟ですが自衛隊違憲、公害訴訟、住基ネットなどの裁判のエピソードも盛り沢山で、戦後司法の歴史が網羅されています。実在の人物と架空の人物が登場して、頭を整理しながら読まなければなりませんが、裁判官もまた、民間企業のような権力争いがあるとは意外でした。裁判所という権力機構は元来保守的な風土で、原発訴訟で原告側が理論では勝っていても、判決がその通りにならない理由がわかったような気がします。

憲法よりも戦後の経済復興を優先させたい自民党から圧力がかかっていたためと、後に最高裁長官を退いた弓削が示唆します。津崎もまた組織の一員として国家権力の弁護を担います。だが村木は金沢地裁にいたとき、原発訴訟の現場で緻密な審理を重ね、日本で初めて、稼働中の原発の運転差し止めを言い渡します。志賀原発訴訟がモデルのようです。傍聴席から万雷の拍手が巻き起こり感動的な場面です。伊方訴訟の一審の裁判長変更を巡る経緯は事実とか。脱原発弁護団全国連絡会共同代表の海渡弁護士も実名で登場します。

裁判所は最近、安倍政権の原発推進の姿勢を戻しているそうです。泊原発を廃炉にする闘いも、各地の原発訴訟と連携して大きな力にしなければと気持ちが引き締まりました。

大人の樹木学

石井誠治著　洋泉社1000円＋税

石井さんは樹木医であり、森林インストラクターとして多くの野外講座で活躍しています。「木を生活の中で活用しながら生きていた一昔前の人たちにとって、木の情報を知らずに生きていくことは困難でした。有史以来木に頼って生きてきた人類の歴史を意識する時、樹木の発する情報がわかると面白いものです」とあります。

木の寿命は根が決めることも初めて知りました。我が家のカナダトウヒは、鉢の中で根を張れなくなって枯れました。大地に戻した時には既に遅しでした。関心のあるテーマを簡潔にわかりやすくまとめています。何故常葉と落葉する木があるのか。根のすごい力、自然では孤独な木はいないなど。謎が解けると楽しい。森の散歩には必ず持っていきたいお勧めの1冊です。石井さんは日本山岳会会員。

個人の尊重を歌う憲法13条のCDを広げて・・・・

自宅を開放して、自由に語り合う場「紅茶の時間」を主宰している石川県津幡町の水野スウさんが、自由や幸せを追求する個人の権利の尊重をうたった憲法13条のうたをつくりました。

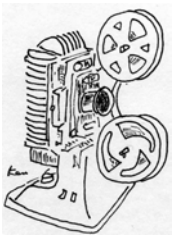
スウさんは、やわらかい言葉に置き換えて歌「ほかの誰とも」をつくりＣＤにしました。やさしい日本語訳は娘の万依さん。ギター、ピアノ演奏は友人が協力して完成させました。

付属の小冊子には歌詞に加え、歌を作るに至った経緯や９条をはじめとする現憲法を守る大切さも載せています。スウさんは「憲法は国の権力を縛るもので、主語は私たち。私たちを逆に抑え込もうとする国に、わたしたちは声を上げないといけない」と取材に答えています。

秘密保護法に警鐘を鳴らす歌を多くの人に聴いていただきたいと思います。透き通った美しい声とやさしく伝える詩に、涙が溢れました。

聴いてみませんか？私も扱っています。自宅FAX 011-382-9020 又は　minginga@agate.plala.or.jp　送料込300円

まとめて注文される方は水野スウさんへ　sue-miz@nifty.com



ベニシアさんの四季の庭　監督・菅原和彦

京都・大原で100種類ものハーブを育てているイギリス人女性ベニシア・スタンリー・スミスの暮らしを見つめたドキュメンタリー。

1950年、英国貴族の家系に生まれながらも、19歳で放浪の旅に出かけ、大原の古民家での暮らしを選びます。日本の四季にイギリスの伝統を散りばめたベニシア流の「手づくりで丁寧な生活」を追うとともに彼女の知られざるエピソードを通し、そのしなやかな心の秘密に迫ります。

日本人と結婚し3人の子供を育てますが、離婚。山岳写真家の梶山正と再婚し、息子を生みます。夫がフランス人と恋に落ち、離別の危機も。帰ってきた夫がクライミング中に滑落し、生死をさまようような大事故。娘の精神の病の発病の苦しみなどが語られます。

「困難には意味がある」と捉え、前向きに乗り越えて行く姿が素敵です。夫を少しも責めないのです。家を出ていった時にも、大怪我の時も「ただただ帰ってくることを祈った」と語るベニシアさん。家族の一人ひとりを大事にするベニシアさんの生き方に共感すると同時に、裕福な貴族に生まれながら自らの人生を選び、手作りの生活を送るベニシアさんの強さとやさしさに心が洗われました。

標的の村　監督・三上智恵

ヘリコプター離着陸帯（ヘリパッド）建設や新型輸送機オスプレイ配備に反対する沖縄県東村高江の住民たちの姿を記録したドキュメンタリーです。

米軍北部訓練場を低空飛行で飛ぶヘリ。戦場さながらに実践訓練が行われている映像から始まります。「人の命をなんだと思っているんだ」と叫ぶ住民の声がヤンバルの空に響き渡ります。まさに生きた人間を標的にして米軍による訓練が行われているのです。

高江は160人ほどの住民が、農業や漁業で穏やかに暮らしていました。そこに新たなオスプレイ配備のためのヘリパッドを建設しようという計画が発表されます。滑落事故も多発して住民の命が脅かされると、住民は2007年から計画を阻止しようと座り込みを始めます。

2012年9月29日、強硬配備前夜。台風17号の暴風の中、人々はアメリカ軍普天間基地ゲート前に身を投げ出し、車を並べ、22時間にわたってこれを完全封鎖します。一部始終を地元テレビ局・琉球朝日放送の報道クルーたちが記録していました。全国ニュースでは伝えられなかった事実。全編にみなぎる人々の怒りと悲しみを捉え圧巻。

沖縄が抱える苦しみが、どんなにたくさんの本を読むより伝わってきて、胸が締め付けられました。

「ハンナ・アーレント」の上映が12月21日から始まります

「ハンナ・アーレント」は12月21日（土）からシアターキノのお正月メイン作品として上映します。今年最もお勧めの一作。上映初日の21日（土）夜には、北大の山口二郎さんと吉田徹さんの特別トークも行います。是非観てください。（前号に紹介）

購読料をありがとうございます（敬称略）2013.11.3～12.7

安川誠司（札幌市）梅沢俊・節子（札幌市）カレンダーも　土岐由紀子（札幌市）助田梨枝子（芽室町）カンパ含む　和田マサコ（豊浦町）切手　里見清子（甲府市）カンパ　熊坂政晃（八王子市）安田成男（札幌市）カンパ含む　小野妙子（札幌市）カンパ含む　及川文（札幌市）石井誠治（東京都世田谷区）著書　計20,000円は印刷と送料に使わせていただきます。ありがとうございます。

今年も残すところ半月になりました。なんとか健康で通信の発行を続けることができました。戦前に逆戻りするかのような秘密保護法が成立しました。自由に語ったり書いたりできなくなるのは嫌です。2014年は秘密保護法を廃案に、原発の廃炉が実現できるように頑張りたいと思います。

（みな子）